

各界現役シニアに聞く

## 「それは政治です」

ぶれない首相を支えた80歳、藤井裕久民主党最高顧問に聞く

2012年10月4日（木）

衆議院第一議員会館919室にて。

新世紀このかた10年余、手つかずのままといつていい「高齢社会対策」を論ずるにあたって、会うべき必要のある方々はだれとだれかが話題になった。そのときその立場にある方々というのは、政治家、官僚、経済人、学者、マスコミ関係者、著名人そして活動を支えている先駆的な人びとで、政治家としてまずあがったのが藤井さん。「尋根求底」のためには1980年代までさかのぼらねばならず、そこまで深く遠く経緯を求めるとなると、優れていても40歳、50歳代では根までとどかず、90年代以降に本格的な政治活動をしていた人となれば70歳より前には求められなかったからである。2009年7月、ジャーナリスト仲間の会でのこと。

2009年8月30日に総選挙があつて、民主党が大勝して政権の交代があつたあと、藤井さんは「渦中の人」でありつづけた。会う必要を感じながら3年を待つこととなった。50歳代の野田佳彦首相がぶれないよう支えつづけて「消費税増税」法案を採択し、国際的には日本政治への信頼を確保することとなった。財政上のひとしごとは終えたものの、あとの経済成長をどうするか課題に明解な回答をしてくれるであろうという期待をもちつつお会いした。

10月4日（木）午後、尾崎美千生・元毎日新聞政治部記者の「驥尾」に付して、議員会館の事務所919号室にお訪ねすることができた。政界の経緯を熟知しておられる藤井最高顧問と「産婆術」を心得た熟練政治記者尾崎氏の示唆に富む時局対話のがのっけからしばらくつづいた。おふたりは和気あいあいの対話のうちに現状に鋭くメスをいれて、その解決法まで示唆してくれたのだった。わたしはそこに挿入するようにして、「日本長寿社会（高齢社会）」のありようについての積年の憂慮を伝え、ご意見を聞いた。

.....

尾崎さんの眼疾による視野の右傾化という洒落な報告からはじまり、解散時期と「維新の会」の力、第3党はどこか、野田総理のぶれない戦略、人をみる目、組閣の顔ぶれと身体検査のこと、田中直紀・真紀子論、臨時国会・赤字国債へと話題は次ぎ次ぎに展開して、奥行きのある応答が途切れることなくつづいた。藤井さんの政局へのご意見には関心があるだろうが、ここはその場でないので省略させていただいて。

.....

尾崎：「高齢化」の話を。

## 高齢化・高齢社会について。

### ・「福祉税」を完全目的税に

藤井：まずは「国民福祉税」ですね。小渕内閣のときに完全目的税にした。当時の自由党をリードした考えは、この社会を建て直した人はいったいだれなんだ。若い人は恩恵を受けているだけではないか。もっといえば「赤紙」をもらった人が戦後がんばった。この人たちの晩年に報いるために「高齢者3経費」（高齢者介護・高齢者医療・年金）として目的税にして、それ以外に使えないようにした。宮沢大蔵大臣は野党の提案だけれどもわかってきて、自民党には完全目的税という発想まではないけれどもといて、予算総則に「高齢者3経費」にしか使えないと書いた。完全目的税というのは会計的に目的税だから一般会計にいれない。そのときに広げて、子どもを加えて4経費になった。もうひとつ高齢者医療だけでなく一般医療にしたので医療保険にも使えるようになっている。

### ・「消費税」案は与謝野氏の功績

藤井：今度の「消費税」案は政権交代の前に自公がつくった。福田・麻生内閣のとき、自民党で与謝野（馨）がリードした案だけれど、全うな人がつくったものだから勉強しろと言った。民主党になって菅さんの最大の功績は与謝野を引っ張ってきたこと。与謝野の行績というのはふたつ。会長としてマスコミによく説明して納得させたこと。3・11のあと「こんな時に増税か」という声のなかで静かにやっていた。6月末までの3カ月でできたのは与謝野の功績です。すぐ横にいて助けましたよ。東大野球部の仲間だから。

### ・全国民の負担がいい

堀内：野田さんからは見えない、50歳代からは見えない高齢者の姿がある。高齢者を騎馬戦や肩車をする姿で負担を説明するが、上に乗っているのはお年寄りじゃない。多くの高齢者はいま「支える側」にいる。3000万人の80%がそう。

藤井：若い人は年金をもらえなくなるといわれてそう思っているようだが、日本国家の破産ですからそれはありえない。対応は三つある。1つは借金。南ヨーロッパだよというところ。2番目は保険料。会社員、役人、自営業になれば実感する。3つ目は若い人ばかりではなく全国民が薄く負担する。そして君らの年金を安定化する。ディスカッションさせるとまず100%が消費税。じいさんでもばあさんでも消費することで全国民が負担する。若い人だけが支えるわけではありません。だからわたしはあれ（肩車）をいったことありませんよ。野田さんもやめた。

### ・「高齢者雇用安定法」

堀内：「高齢社会」形成の問題を1999年の「国際高齢者年」以来みているが、元気な高齢者がどんどん増えているのにやることをつくれなかった。だから知識も技術も資産も残ってしまっている。これは政治家の構想力の欠如ではないですか。

藤井：そのとおり。そこで「高齢者雇用安定法」は、65歳まで働けるようにした。年金とむすびついている。いずれは67、68歳までなる。日銀ではなくて、資産の1500兆円を活かすのがいい。おれおれ詐欺で1000万もやられる。まっとうな消費に使えば

いい。働ける人まで働かせないようにしていることが問題です。

堀内：政治ですよ。

藤井：政治です。65歳までを会社と労働組合と雇用者で決めてきたけれどもそうではなく、能力のある人はかならず働いてもらうしくみにする。「高齢者雇用安定法」ができたが、まだ65歳まで。ぼくら80歳でもやりますよ。

### 高齢者の政治代表

尾崎：それで政治でいうと、小泉さんのときに中曽根さんと宮沢さんにやめてもらったりしたのだけれど、24%の人が65歳以上になっているのだから、高齢者の代表はもっとあっていい。

藤井：そういうとまたやれといわれるから。

尾崎：やりたくないというのならそうはいえないけれど。政治家もそれなりの人はやってもらったらいい。

堀内：藤井さん、岸（恵子）さん、樋口（恵子）さん、堂本（暁子）さん、石原さん。みんな同い年の80歳。

藤井：石原が新党つくるといっているが、むずかしい。80歳になるとクリエート（つくりあげる）する力はない。知恵はある。石原はサッカーでわたしは野球。わたしとどっちが元気かわからないが、知恵はあります。クリエートはできない。しごとも土木はできないが、知恵は大事ですよ。いっしょうけんめいやりますよ。

### ・世代交代

堀内：10年をみていまして、単純に世代交代が進みすぎて社会経済のパイがどんどん小さくなっている。パイの外に優れた技術や知識がある人がいるのに使っていない。外国からみたら日本はちがうんじゃないか。ひょっとすると成功例にならない。

藤井：日本は高齢化率が高い。めんどろみてもらう対象にしてしまうのがいけない。みんなが負担するのがいいといったけれど、それだけでなく社会に貢献もできる、両方なんですよ。

堀内：古い「男の美学」が生きている。しごとがおわったら隠居。

尾崎：先生は80でご隠居やりたいのですか。

藤井：やりませんよ。うらでやります。野中（広務）さんも86歳かでしょ、うらの仕事です。じじいが出てくるのは何だというのはまだ日本にはありますね。小沢さんに頼まれたことがあったが、中年まではわたしのことをわかってくれますが若い連中は知らない。知らない対象は説得できない。そういう社会なんですね。ごめんこうむります。うらのしごとです。

### ・アジア社会への貢献

堀内：朝日を早期退社して中国中原にある古都の洛陽から日本を見てみました。すぐれた国でした。日本製のモノを使って日本人のように暮らしたい。15年くらい前のこと。いまは日本は技術も人材も資金も送ってアジアのモノづくり、近代化に貢献している。歴史

家はそう書く。しかし政治家は逆にこわしてきた。

藤井：日本は科学技術に優れている。「新成長戦略」には書いてある。それを提供してともに繁栄する。企業人はやっている。もうひとつ大事なことは先端技術ばかりでなく「匠」の技術です。料理人、すしや、旋盤工、「匠の技術」はなんでもすぐれている。自由業でやれる人はやっています。あとは大企業サラリーマン。これがわが国の中核ですからね。これを65歳まではなんとかしようとして法律を直したわけですが。

尾崎：戦後に果たしてきた日本のアジアでの役割はそうとうある。

藤井：あります。

#### ・政治家の歴史認識

尾崎：若い人は歴史を勉強していない。

藤井：そのとおり。尖閣も勉強していない。党として「近現代歴史調査会」をやっている。議員だけでなく取材に来たマスコミの人なんかで満員。講師に新聞社の人にもきてもらった。幹事が「マスコミはなぜ戦前墮落したか」を頼んだら、「なぜ戦争を押さえられなかったか」でかんべんしてよ。

尾崎：それはやりづらい。新聞は戦争をあおって部数を伸ばした。

藤井：満州事変では規律を破った「越境将軍」を礼賛したし、松岡（洋右）の連盟脱退でも「孤立」を礼賛した。「よくやった」あれも礼賛。昭和6年にはまだ統制はなかった。仲良くしないと取材できないことで。

#### ・高齢熟練社員のこと

尾崎：高齢社という会社があって、遊んでいる人にしごとをつくって。週に2、3回、日程は自由で働きたい人に働いてもらう。いま年収が3億円に。

藤井：需要があるんですね。経営者と決めるのではなくて能力のある社員は置くこと。月給をさげてもいいということにはなっている。

堀内：そのことで最後にひとつ。長年やってきたしごとの先で、高齢熟練社員は高齢者が使う優れた製品をつくれませんか。若い人のしごとを取るのではなくて、自分たちの暮らしを豊かにする製品をつくる。それぞれの企業が温存している高年技術者が企画してつくれたらしごとができてくる。そこしかない。65歳までつないでもしごとをふやさないかぎりには。

藤井：いままでの会社のしごとをやってもらう。

堀内：はい。温存しておいて、新しい企画をした人を残して。それなら自分もやる気になる。定年まで窓際で、出してほかのところでやらせるのは違う。

尾崎：winwinの関係をつくる。

#### ・商品も居場所もこれから

堀内：モノについては日本企業が東南アジアへ出ていってつくる百均商品が多すぎる。それまでは日本の熟練技術者がつくった優れた商品がありました。われわれ高齢者はアジア共生のために百均商品でがまんしてきた。そろそろやや高でも安心して使える製品づくり

をごく身近なところでそれぞれの企業がやる。

藤井：なるほどね。

尾崎：若い人の集まるまちは竹下通りとかある。老人が好むまちやマーケットがあつていい。阿佐ヶ谷なんかがいい。

藤井：デパートには老人コーナーができています。あれは大事なことです。

藤井：・・・それでは。

堀内：三年分の細かいこと。まだこんなにあります。

藤井：またやりましょう。

おふたりは「二階堂（進）さん以来だから」といって、共有している時期のことをしばし思い起こしておられたようでした。

財政上のひとしごとは終えたものの、ここまでは道半ばである。これからあとの経済成長をどうつくるかの課題に明解な回答をという期待をもってお会いしたのだった。熟練高齢社員のありようについてはお話をうかがえたが、もうひとつ地域活性化のための自治体と高齢者の役割については踏み込めなかった。「尋根求底」のためにはもう一度の機会をえて、政治の側から深く遠くわが国を蓋うデフレーション（萎縮）からの脱却の道筋を解明していただければと思う。

（ 2 0 1 2 ・ 1 1 ・ 1 堀内正範 ）